
6 2 手

今西 克己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

62手

【Nコード】

N3369T

【作者名】

今西 克己

【あらすじ】

下手の横好きの将棋が趣味の佐々木には運命の人と決めている人がいる。少年のころにたった一度だけ出合った名前も知らない少女大人になった彼は今でもその女性を運命の人として探し続けておりついに会うことができるが……

僕は親しい女性ができると思わずしてもらうことがある。

その人との運命を確かめるものと位置づけているその行為は将棋を指すこと。1局指す必要はない。ただ一手だけ僕の目の前で駒を動かしてくれればよい。

僕は棋士ではない、トップアマでもないただの将棋が好きなの男で強さはネット将棋の中級くらいだ。

今日は知り合いの女性を家に呼んでいる。

僕は独身の一人暮らし、男として警戒されてないのか脈アリなのか、僕は将棋盤と駒を用意してその女性を待っている。彼女は以前の知り合いであるがぼくの家に来るのは今日が初めてである。残念ながら彼女が運命の人でないだろうがかすかな可能性を信じるようにと自分に言い聞かせる。

約束の時間は12時ちょうどテレビの将棋が終わる時間である。

トゥールルルル……

僕の携帯の着信音であるメロディーが狭い部屋に鳴り響く、ひと通りリズムを楽しんでから電話にでる。

「もしもし」

「亮君？いま近くのコンビニに着いたんだけど何かいるものある？」
気の利いた女性だ。彼女は会社の同僚で先月の飲み会の時に妙に気があった。綺麗というより可愛らしい女性で歳は僕の3つ上の先輩という関係である。

それから二回夕食を共にしているが僕はデートだとは認識していない。

二回目の食事の時から彼女は僕のことを名前である『亮』と呼ぶようになったが、僕は彼女の苗字である庄島に『課長』をつけて呼

んでいる。

彼女はそれに不満はないのか何も言いはしないし僕は苗字で呼びつづけるつもりだ…その関係が変わる可能性があるとするれば今日。

10分後、チャイムが鳴り僕は覗き穴から外を確認せずにドアを開ける。

「庄島課長暑くなかったですか？」

両手にコンビニ二袋を持って彼女は立っている。休日ということでは彼女ラフな格好をしており体の線がよくわかる。スーツ姿の時には気づかなかつたが豊満なからだをしている。健康的で僕の好みだ。

「暑かったわ」

「すぐに麦茶をいれるから入ってください」

僕は部屋に入るように促す。

「お邪魔します」

入ってきた彼女は部屋をざっと眺めて

「キレイにしてるのね」という。

「汚い部屋を想像してたんですか？」

「ええ、一人暮らしの男の人の部屋って汚いイメージじゃない」

「一人暮らしの男の部屋に来るのは初めてですか？」

「初めてじゃないわ」

「二桁は？」

「いってないわ」

「その時はキレイでした？」

「それなりにキレイだったけどいかにも片付けたばかりですって感じばかりだったわ」

「僕の知ってる人もいるんですか？」

「ノーコメントよ」

微笑んだ彼女から察すると一人くらいはいそつだ。

「その座布団に座ってください」

僕が盤前の座布団に座るように勧めると。

彼女は座布団にすわり、コンビニで買ってきたビールやチュウハイの入っている袋を透明なガラスの台においた。

僕がグラスに入れた麦茶を渡すと、彼女は一気に飲み干した。首筋に流れる一筋の汗が艶めかしく彼女のＴシャツに吸われていく。下着の線は見えていて余り胸元を見るのはさけることにしよう。と僕は意識する。

休日とはいえあまりにも無防備な格好だ。見る方からすると良いことではあるけれども。

「もう一杯飲みますか？」

「いいわ、買ってきたビールを飲みましょう」

「そうですね。せっかく暑い中買ってきていただいたんですから」

「感謝しなさい」

「ありがとうございます。お姫様」

僕はグラスを受け取り、すぐさま洗った。正直、口紅の跡に目が奪われたが男なら仕方がないよな。手慣れた手つきでグラスの水気を取り直し、彼女の向かいの座布団に座る。

彼女は将棋盤を漫然と見つめていた。

「将棋知ってます？」

「駒の動かし方が分かる程度かな」

この一言で僕は違う事がわかる。しかし、一応は試してみる。

「僕の唯一の趣味です」

「覚えておくわ」

「ちよつとビールを飲むのを待ってください」

僕は盤面に駒を並べる。誰がいまの駒の配置を考えたのだろう。

この美しい配置と文字……将棋こそ世界一の知能娯楽であると僕は自信を持って言える。

7六歩、僕は一手目を指す。

「指してみてください。適当にでもいいです」

彼女は少し戸惑っている、それはそうだろう。初めて来た男の人の家でいきなり将棋を指せと言われることはない。

彼女は遠慮がちに僕と対称の手となる3四歩と指した。
駒から手を離れた彼女を僕は見る。

違った……まあそうでしょう。

僕は少しだけ落胆した。九割九分諦めていることなのでほんの少しだけ、ほんの少しだけ。

「将棋は難しいですよね」

「うん、わからないわ」

「じゃあ、つまらないですね」

僕は笑顔で駒を回収し将棋盤と駒を片付けた。彼女は表情が少し硬くなっている。僕のことを変人だとも思っているのかな。

「では飲みますか」

「ええ」

僕と彼女はコンビニで買ってきたアルコールを飲みつまみを食べ、恋愛映画のDVDを観る。僕は雰囲気に乗せられて背中から座っている彼女を包むように抱くと彼女も拒否はしない、普通の男女ならそのまま男女の行為へと発展したのかのしれないが、僕にはその気はない、彼女には失礼だったのかもしれないがDVDが終わるまで僕は彼女を抱いたまま動かずエンディングテーマが流れると電気をつけた。

「ねえ、私のこと嫌いなの？」

「嫌いじゃないですよ」

「私魅力が無いのかしら」

「十分魅力的ですよ」

「じゃあ、どうして」

「嫌いではないですけど、違うんです」

「違う？」

「はい……これは僕の胸だけに閉まっていることで誰にも言えない事ですけど」

「そう」

「すみません」

「謝ることなんて無いわよ。それに私にだって彼氏くらいいるんだから」

彼女は不満げな表情を隠しきれていないが納得しているふりをしてくれた。そして会社の雑談などをしたあと彼女は帰っていった。

閃光

佐々木亮が初めて将棋を見たのはおじいちゃんの家だった。

隣に住むおじいちゃんのライバルである戸次のおじいちゃんとの将棋を幼い彼は眺めていた。いつもはニコニコ笑顔のおじいちゃんが将棋盤の前では真剣な表情になり、その顔はしわくちゃだけれどかつこ良かった。亮は邪魔をしないように息をひそめて二人の男の真剣勝負を眺めていた。

やがて手が進んでいくと二人の性格が出てくるおじいちゃんは自分が勝ちそうになると盤面に顔を近づけるし、戸次のおじいちゃんは貧乏揺すりが激しくなる。

勝負の優劣がわからない亮が自分で見つけた判別法だ。

勝負が着くと二人はまた最初から始める為に駒を並べ直すか、黙々と手を戻し検討を始める。その時、亮はなんとも言えない緊張から開放される。おばあちゃんが用意してくれたせんべいや羊羹をやつと口にすることができるとおじいちゃん達が将棋を指している最中は音を立ててはいけない気がしていたのだ。

最初の頃亮はどっちが勝ったのかわからなかった。盤面には読めない文字の駒たちがいくつも散らばれていて、駒の向きでどちらの駒かは分かっている。でも、おじいちゃん達は詰みまで指さないからちんぷんかんぷん、だから判別法を探した。

「おじいちゃん。僕、おじいちゃんと将棋をしたい」

当時5歳の亮が言うとおじいちゃんは満面の笑みになった。亮が生まれたばかりの頃に一緒に写った写真と同じ笑みを浮かべ大声で笑った。

「おじいちゃんどうしたの」

漬物を付けていたおばあちゃんが驚く、ちなみにおばあちゃんの梅干こそ至高である。

おじいちゃんは細くなった腕で亮を抱き上げ高い高いをする。亮を下ろした後咳き込んでしまった。

亮の父親は将棋に興味を持たなかったからおじいちゃんは寂しがつていた。

後年、おばあちゃんが教えてくれた。

それから亮はおじいちゃんの家に行くたびに将棋を習った。10日もすれば一応指すことはできるようになるがとてもじゃないが勝負云々のレベルではない。6枚落ちでも惨敗を喫する。でも指せば指すほどはまり込んでいく。

時折おじいちゃんが亮が興味を失わないようにわざと負けてくれたが亮は素直に喜んだ。

そしてまた将棋が面白くなり深みに嵌る。

それから5年、亮は平手でおじいちゃんと互角に指せるようになり、自信を持って地域の小学生の将棋大会に参加した。

その一回戦相手は女の子だった。先手後手はトーナメント表の左が先手と決まっついていて亮が先手になる。

「お願いします」

一礼し亮は初手7六歩を指す。

それなりに自信を持って亮は大会に参加している。

それから十秒ほどして少女はゆっくりと3四歩と指した。

「……………」

亮の目に閃光が走った。

少女が歩を盤面においた瞬間、その右手が一瞬閃光を放った。

なにが起こったのかわからない亮は少女の顔を見ようとしたが少女は顔を下に向けている。亮は心を乱しながらも一生懸命に指したが、わずか六十二手で詰まされた。

「ありがとうございます」

亮と少女は頭を下げ亮は席を立つ。

「手合い違いじゃったな。序盤のミスがひどかった」

おじいちゃんは不甲斐ないなという顔をしている。

「おじいちゃん。あの女の子の手光ってたよね」

「堅実で良い手じゃったな」

「そうじゃなくて」

亮の言うことがおじいちゃんには伝わらない。

僕にしか見えていないの？ 亮は不思議な感覚を覚える。

おじいちゃんと亮はすぐに家に帰っていった。いまになってみれば、その少女の顔をよく見ていればよかったと亮は後悔している、少女の顔をよく覚えていない、名札に記されていた名前すらも。

それから亮はさらに将棋に取り憑かれ毎日、近所の将棋道場通いを始めることになるがいかんせんセンスがないようで道場ですらせいぜい二番手止まり、棋士とはいかに天才であるのか痛感させられる。

冗談でもプロ棋士になりたいとは言えない。

しかし亮は将棋をやめるつもりはさらさら無い。将棋というのは勝ち負けだけではないのだ。

そりゃあ、勝てば嬉しいし負ければ悔しい、壁を殴りつけたいほど。

しかし例えば、上級者と低級者が戦いをみているとする。将棋というのは手合い違いが残酷なほど現れるものであり一方的な勝負となることが多い、そして追い詰められた低級者が紛れや一撃を狙い勝負手を放つ。受けられれば終わりという手でそのほとんどが指した本人自身が受けを分かっている、しかし勝ちにはそれしか無い。

まれに、ほんとに極稀にその中に感動の一手があるのだ。その手を見ると亮はトイレにいき一人で声を出さずに笑う。多幸感が彼を襲い至福のときが訪れ、将棋の奥深さに感謝する。

そしてまた、見学に戻り勝負を最後まで見届ける。九割方勝つの

は上級者の方であり、感動の一手を放つてもそれからの詰めを低級者は間違えることが多い。

家に帰り、亮はその一手を再現する。たまらなく気持ちがいい、この一手を自分が思いつくことができるようになりたい……彼はますます将棋に対して執着心を持つ。

そして亮が心に決めていること、それは初めて亮に閃光を浴びせた少女を何としても探し出すこと。

高校時代、彼はわざわざおじいちゃんの家近くの私立の高校を受験して、おじいちゃんの家から学校に通い毎日放課後その地域にある将棋道場めぐりをしたが閃光を放つ女性に会うことはできなかった。

彼女は引越したのだろうか？それとも亮のように親戚の誰かに連れられ参加しただけなのだろうか？もしかして将棋をやめてしまったのだろうか？負けてすぐ帰ったので彼女がどこまで勝ち上がったのかは知らない。それも後悔している。

雨の日

その日は朝から空が黒い雲におおわれていた。

午後の降水確率は100%。

亮はいつも同じ時間の満員電車で揺られ通勤している。空いている女性車両が羨ましい、座りたいわけじゃないがゆとりのあるスペースが欲しい。

だからといって女性が全員女性車両にいたることはなく降りる位置を考えて普通の車両にのっている女性もいる。

駅から徒歩10分のところに会社がある。まあまあその業界では名が通っている会社だ。

「おはようございます」

所属部署が自社ビルの7階にあり、エレベーターに乗ろうと待っているときに庄島が挨拶をしてきた。着痩せするタイプなんだな、昨日の彼女の豊満なスタイルを思い出す。

「庄島課長。おはようございます」

亮も挨拶を返す。エレベーターが来て乗るとたまたま二人きりになる。

「二日酔いで頭が痛いですわ」

「昨日はそんなに飲みましたかね？」

「帰ってから友人と飲みの行きましたの。男の方よ」

『男の方』を強調する。亮は自分が思わせぶりなことをしてしまったことは自覚している。彼女には悪いことをしたので責められても返す言葉はない。

「そ、そうですか」

「その方とそのままホテルまで行ったわ」

「彼氏がいるんじゃないんですか」

「彼氏は何人いてもいいじゃない」

彼女の言葉には強い感情が込められている。大人の女性に失礼な扱いをした亮がわるい。彼女に亮はもう少し気を使うべきだった。

亮だってあの少女がいなければ庄島と男と女の仲になつてただろう。彼女は十分に魅力的な女性である。

同じ部署であるので同じ階で降りると彼女はさっさと亮を置き去りにするように早足で歩いて行く。怒りがよく表れた早足。

「おはようございます」

元気よく挨拶をして部署に入っていくと皆が元気よく挨拶を返してくる。いつの時代も挨拶は人間の基本だ。

亮が自分の席に着くと大学時代の同級生で先に入社していた関口が機嫌よさ気に近寄ってくる。まあいつも脳天気な奴だが……。

「おい、佐々木聞いてくれよ。昨日さ庄島課長から電話が入ってさ何の要件だと思う？」

亮は知っているが自分が原因であるとは言えないのでとぼける。

「さあ、わからん」

「これから一緒に飲みに行きましようだってさ。それで待ち合わせの場所にいつてみると胸元の大きくあいた服を着た課長がいてさ、びっくりしたよ。課長って巨乳だったんだな。その先聞きたいか？」
別に聞きたくはないが関口が言いたそうなので佐々木は

「聞きたい！」

と、相槌を打ち乗り気な演技をした。

「居酒屋に行ったら。彼女飲みまくって酔いつぶれてしまってたね。そのまま介抱するふりしてホテルまで行ったんだ。そしてことが終わって一眠りして起きると彼女が先に起きていてさ『君のこと前から気になってから付き合ってた』って告白された。もちろん俺は即OKしたぜ。」

「羨ましいな」

「ありがと、でも会社でどう接すればいいかまいち難しいな。それにしてもいい体だった」

「佐々木くん、来てるでしょ。ちょっといらっしやい」

庄島からお呼びがかかった。

「君、事務処理得意だったわよね。これ今日中に処理してちょうだい」

膨大な量の書類を渡される。一人に任せる量ではない。

「言っとくけど、ウチは残業なしだからね。なるべく早く終わらせて」

亮は昼食を栄養ドリンクにして定時の午後6時まで書類の整理をし、なんとか仕事を終わらせた。すこぶる疲れた。

運動の疲れとは違う、なんか重く気怠い疲れを抱え会社を出て駅に着くといつもより歩くのが遅くなっており、いつもの電車を乗り過ごした。たった10分だがネット将棋の何手分損したか？なんてことを亮は考える。

自宅の最寄りの駅に着いたのは午後6時50分。念のための手帳を見ると今日は対局の予定はいれていない。いまのネット将棋はチ

ヤットで対局の約束をすることができ、便利になったものだ。

「あれ、あの少女は泣いているのかな」

物憂げな表情をしている制服姿の女子高生が雨を眺めている。

「何かあったの？ いや、こんなおじさんに話す必要はないけど」

亮はなぜか彼女のことを気になり、つい近づいて話しかけた。

「寂しいんです」

そう言う女子高生は亮に抱きついてきた。突然の出来事に反射的に彼女の背中に手を回してしまう。冷静なときなら周りの目を気にすることだろう。

彼女は亮の胸で泣いている。事情は知らないけれど小柄な彼女がなんと愛おしく思えてしばらくそのままにしておいた。わずか数分の出来事なんだろうが亮には早指し一局分くらいに感じた。

亮は彼女を一人きりにするわけにはいけない気がした。

初対面なのに離れるのが心苦しい。もし一人にすると彼女は壊れてしまうかもしれない、そんな予感がする。それでもないと見ず知らずのこんなおじさんに感情を顕にし抱きついてくるはずがない。

「僕の家に来るか」

亮は思ったままの脳で咀嚼せず口に出した。胸に顔をうずめていた彼女は顔を上げ亮の目を黒い澄んだ瞳で見つめる。ずっと眺めていたい綺麗な瞳だ。

「いや、その……なんていうか、君を放っておけなくて。なに言っただらうかねこのおじさんは」

亮は自分の発した言葉が恥ずかしくなり照れ笑いを浮かべた。彼女は数秒亮の目を見つめ続け。

「いいんですか？」

と、答えた。亮には意外な答えであった。

「冗談だよ、冗談……」

雰囲気をごまかす為にそう言ったが彼女の目の真剣さにこの空気を流してしまおうという気持ちは消え去った。

タクシーを拾い彼女と共に自宅へと向かうように運転手に行き先

を指示する。

「狭い部屋だろう。座るので精一杯だ」

彼女を部屋に招き入れた亮は自虐を込めていった。

「一人暮らしですか?」

「もてないからね」

「おじさん、いい人そうなのに」

いまになって亮は一人暮らしの男の部屋に彼女を入れることをマズいと焦った。大人である庄島とは違い、女子高生を部屋に入れるのは誰かに見られていたら嫉妬も込めて怪訝に思われることだろう。だが、それにもましておじさんと言われたのはシヨックである。自分ではおじさんと言っても人から言われるのはこたえる。

「自己紹介するよ。僕は佐々木亮」

丁寧の名刺まで渡す。

「私は桂あゆみといいます。おじさんって言うてごめんなさい。まだお若いのに、他にどう呼んだらいいかわからなくて」

気にしていたから嬉しいフォローだった。

「気にしてないよ。水でいいかな」

「はい、ありがとうございます」

亮は冷蔵庫からペットボトルを取り出し彼女に渡す。

「将棋を指すんですか?」

昨晩は詰将棋を指したまま眠くなり片付けをせずそのままベッドに入って眠りについた。

「下手の横好きってやつだね。昔からの趣味だ」

「そうですか」

あゆみは並べてある駒を見て。パシツという音を立て一手指した。今日はハードワークだったし疲れているのかな。

亮の目は一瞬カメラのフラッシュを浴びたようにようにチカチカした。首を回しストレッチする。

「君、将棋指せるんだ」

「少しだけですけど」

一手目は正解。亮は本に書いてあるとおり受けの手を指す。
パシッ

「ごめん、ちょっと顔を洗ってくる」
視神経がおかしいのか？

亮は洗面所の冷水で顔を洗いタオルでしっかりと拭く。やっぱり
目がチカチカする。戻ると彼女は詰将棋を解いていた。

「すごいね」

「たまたまです」

こうなると一局指したくなる。

「一局指そうよ」

二人は駒を並べた。先手は亮で7六歩、後手あゆみ8四歩。

「えっ！」

思わず声が漏れる。

閃光が走ったのだ。

あの日あの時亮が浴びた閃光……忘れることの絶対でない衝撃。

「まさか……なんで君が？」

「何のことですか？」

あゆみは不思議そうに首を15度傾げ亮の顔を見る。

彼女の訳がない、あの子は僕と同じ年位だった。

「君は、お姉さんいる？」

「はい、なんで分かるんですか」

もしかして、そんなことあるわけない。

この世に、この国だけでもどれだけ多くの人間がいきいているのか。
そしてそのうちどれだけの人と知り合いになれるのだろうか。もし
彼女があの子の妹だとすればそれは天文学的確率での出来事……気
障に言えば宿命。

「お姉さんも将棋を指すのかな」

「姉は将棋を指してありました」

「その……大会に参加したりしていた？」

「はい、むかし一回だけ参加したことがあるそうです」

「それはF県のMという街であった大会じゃないかな？」

「そうですね、どうしてそんなことまでわかるんですか？」

あゆみは驚いている。

亮も驚くと同時に確信した。彼女はあの少女の妹、自分が運命の人と決めていた人の妹だ。しかし気になる言葉がある。

「お姉さんは将棋をやめたの？」

「やめたというか」

あゆみは目を伏せた、彼女の身に何かあったのか。触れられなくなさそうなので亮は気になるが話を変えることにした。

「もう外は真つ暗だね。ご両親は心配なさるんじゃないかな」

「……両親は交通事故で去年亡くなりました」

「……すまない。でも、一緒に住んでいる人に電話くらいかけておいたら」

「いま一人暮らしなんです」

二人とも黙ってしまった。亮は彼女のプライベートにどれだけ踏み込んでいいのか今日会ったばかりで測りかねる。寂しいと抱きついてきた彼女を一人暮らしの家に帰すというのもしのびない。だとすれば最善手は分かっているが亮の口から言い出しづらいことである。だからといって彼女からその言葉を引き出すのは大人のすることではない。

「あゆみちゃん、ここに泊まっていく？ 明日は学校も休みだよ」

彼女もその言葉を待っていたと思う。

「……いいんですか」

と、小さい声でいうが表情はほんのかすかにだが安心したように穏やかになった。

亮はあゆみがシャワーを浴びれるように遅くまで開いているシヨップに行き。下着と寝間着を買ってきた。

その時間にあゆみはご飯を炊き味噌汁を作り焼き魚を焼いておひたしを用意していた。

「先にいただいてください」

あゆみは言ったが亮は一緒に食べるためにシャワーを浴びて出てくるのを待っていた。

「冷めたら美味しくないですよ」

そうは言うが亮が待っていたのは嬉しそうだ。

「女子高生のセンスがわかんないから店員さんに選んでもらったよ。うん、似合ってる」

「おじさんの選ぶ色じゃないと思っていました」

茶目つ気たつぷりに笑顔をみせる。

二人は食事をしその後、冒険もののDVDを一緒に見た。それが終わったのが午後11時。

「そろそろ寝ようか」

亮はベッドを彼女に譲り自分は絨毯の上で毛布を一枚かぶり寝ることにした。

「じゃあ、電気消すよ」

「待って！」

スイッチをONからOFFに切り替えようとした寸前に彼女が止める。

「あの、今日は本当にありがとうございました」

深く頭を下げる。

「気にしなくていいよ」

「佐々木さんは優しい人。それなのに私は、あなたに隠しことをしようとしている」

「人間誰しも一つや二つ心に閉まっておきたいことはある。そんなこと当然だよ」

「姉のこと……言います」

いまの彼女の顔を見てみると辛くなる。

哀しみの感情をその瞳だけで僕の胸に響かせてくる。

「言いたくないなら黙っておいていい。いまの僕は君の気が病むことが一番の心配だ。ぐっすり寝よう」

「いいえ、言います。それが私にできる佐々木さんへの誠意です。」

実は姉は、癌で入院しているんです。余命は後半年だと昨日先生に伺いました」

「……」

佐伯は言葉を失った。十数年探し求めていた女性とやっと会えそうになったのにその女性は死を宣告されている。まるで自分自身の人生が否定されたかのように何かが崩れ去っていく。

自分はなぜ生きるのか、運命と決めた人は後半年でこの世を去るという。半年あれば奇跡が起こるかもしれない、でも起こらないからこそ人は奇跡を求める。

それにしてもなぜこのか細い彼女がこんな試練を課されなければならぬのだろうか。

「僕と一緒に面会に行ってくれないかな」

亮は訊いた。

「それは……」

彼女はどうか答えようか迷っている。

「わかった。いまの言葉は撤回するよ」

すぐに答えられるわけではない。誰だって衰弱しきっている身内を他人に見せようとは思わない。そのまま会話のないまま二人は眠りについた。

「面会ならず」

翌日、僕が起きたとき、あゆみは部屋にいなかった。

ベッドはきちんとシーツを替えおり、寝間着は枕元にたたんである。眠気まなこにペットボトルの水を飲む。

そういえばこれは昨日彼女が飲んでいたペットボトルだな。僕はあゆみが昨日いた証拠を手に取り、現実であることを脳に確信させる。

あの日の少女の妹に会うことができた。僕は、いまは大人の女性になっっているあの日の少女と運命の糸は繋がっていた。

この世に偶然なんて無い、偶然とは必然に怯えた人間の妄言に過ぎない。これは僕の持論だ。どこかで読んだ小説の一文の受け売りだ。

僕の将棋を指す理由の一つである至福を与えてくれる感動一手も指した人の頭脳、経験、端的に言えば人生が導き出した手であると考えている。

しかし、今なら見えざる何かを信じられる。神はいるかもしれない。

僕は休みの日の習慣である自分の負けた局の棋譜並べをするために将棋盤をベッドの下から取り出すと。一枚のメモが二つ折りにして盤上にあつた。

桂あゆみが置いていったのだろう。中身を見ると街中にある大きな病院の名が記されてある。

姉の入院先に違いない。

僕はその病院に電話をかけ今日は面会の出来るか、またそのためには身内であることを証明する必要があるかななどを訊いた。

残念ながら身内に限るといふ返事が帰ってくる。

しかし僕はどうしてもあの日の少女に会いたい。

「桂さんが入院されてますよね」

「申し訳ございませんが。そういった個人にたいしての質問はプライベートの問題もあり控えさせていただきます」

事務的に対応された。取り付く島のない言い方で頭に來たが病院側からすれば仕方のない対応なのかと思う。

僕はあゆみに連絡先を聞いていなかったことを激しく後悔した。

だが、ここで頭の中でどんなに思考したところでいまこの時、彼女に連絡をとることはできないわけであり、何をすることが一番の好手となる可能性があるのか？

それは、病院に行くことであろう。僕は身支度を整え家を出て行った。

タクシーを降りると僕は受付に走って向かう。

「入院している桂さんに面会したいんですけど」

「下の名前までおっしゃってください」

「ええと」

なんとという不覚、あゆみから姉の名前を聞いていない。

「……」

僕は押し黙る。

「フルネームで行っていただかないと病棟のものに取次ぎできませんが」

「桂という苗字の方は入院しているんですね」

「申し上げることはできません」

「妹さんからここに入院していると聞いて伺ったんですけど駄目ですか」

「残念ですが面会はお断りさせていただきます」

僕は自分の名刺と免許証を差し出した。

「これでも駄目ですか」

「面会できるのは基本家族の方のみとなっております。妹さんと来ていただければいいのですけれど」

あの日の少女は僕の名を知っていない。本人に取り次いでもらっても拒否するに違いない。妹に何も訊いていない自分がふがいなく情けなくみっともない。せめて携帯番号くらいは訊いておくべきだった。

僕は肩を落とし病院を出て行きそのまま家路についた。

家に帰っても今日は何もすることが浮かばない。沈んだ気持ちでネット将棋を指しても相手に失礼だし、レーティングも下がるのは嫌だ。番組を録画するのも忘れて家を出てきたし、一人でDVDを観る気分にもならない。

午後2時頃、適当に携帯をいじっていると僕は庄島に会うことを思いついた。この間の事の埋め合わせをしよう。

酒でも一緒に飲んでパーツとしよう。

僕は庄島に携帯をかけ飲みを誘うと了解を得ることができ、関口も続いて誘うところちは断られた。

午後5時、待ち合わせの駅前で僕らは落ち合った、庄島は薄いピンクのシルクのブラウスに膝上5センチの黒のミニスカート姿で手には紺色の上着を持っている。

「あなたが誘ってくるなんて珍しいわね何かあったの？」

「……はい」

「元気出さない。今日は飲んで嫌なことを忘れましょう」

僕が気を落としているのを察してくれる。

「誘いを受けくれてありがとうございます」

「休みの日は上司と部下じゃないんだから。よし、いきましよう」

僕と庄島は駅から歩いてすぐの居酒屋に個室の予約席を取っており予約時間丁度に着くことができた。和室の作りであるそこに靴を脱いで上がりこむとリラックス出来る。

靴を脱ぐだけなのになぜこんなに開放感を得られるのだろう。

「取り敢えず生二つジョッキは大」

庄島が頼む。まもなく若い男性が大ジョッキ二杯持ってくる。

「なんて言えばいいのかしら……うーん、休みにカンパイ」

二人は乾杯をしてジョッキに口を付ける

「うん、おいしい」

幸せそうな笑を浮かべる。

「美味しいですね」

「もっとフランクになろうよ」

「はい」

庄島は個室用の注文ブザーを押しお酒とおつまみをしこたま頼んだ。

「ちょっとそんなに食べられませんよ」

「いいからいいから」

チューハイ、焼酎、日本酒、ワインそして唐揚げ、イカ刺し、やきとり、ホッケの塩焼き、サラダ、フランクフルト等々台の上にズ

ラリと並べられる。

「今日は私のおごりだからドンドン食べなさい」

「いや、僕が誘ったんですから僕が」

「いいのよ、私も丁度飲みたい気分だったのよ」

「でも」

「上司の言うことが聞けないの？」

ついさっき庄島は今日は上司と部下じゃないと言っていたような気がするが、まあいいか。

並べられた料理を見ただけでお腹いっぱいだが僕は箸を付け食べ始める。

庄島は飲み物主体でたまに唐揚げ、刺身をつまむ程度、ほとんどの料理は僕の担当になった。

飲み放題の時間制限のギリギリまで庄島は酒を飲み僕はひたすら食べていた。

「ごちそうさまです」

「居酒屋もう一軒はしごする？」

庄島の言葉に僕は全力で反対した。お腹はパンパンに膨れているのでどこかで休みたい。

「今の時間に帰っても中途半端なのよね」

時計を見ながら庄島はつぶやく。

「ちょっと休みませんか」

いま思えば、誤解を招く発言であった。

僕は少し落ち着いた場所で胃薬でも飲みたいから言ったただけだ。

「そうね」

と、いい庄島は僕の手を引っ張り目の前のラブホテルの中へ入っていく。

「そういう意味じゃなくてですね」

「休みたいんですよ」

「そうですね」

「問題ないじゃない、もしかして何かを期待してるの？」

「いえ、そんなことはありません」

「だったらいいでしょ」

庄島は自分のペースに引き込む。

休むだけ、休むだけ……………。

僕は自戒の意味を込めて何度も心のなかでささやく。

僕らは中ランクの部屋を選びエレベーターで上がっていく。エレベーターが上昇しているさなか庄島は僕にベツタリとひつついてきた。豊かな膨らみが僕の肘に当たる。

部屋に着くと僕は冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出し胃薬を飲んだ。

庄島課長はせっかくだからと浴室に入ってしまった。すりガラス越しに彼女のスタイルが丸見えになるので僕はベッドに横たわり天井を見る。

「気持ちよかった」

30分後、浴室から出てきた庄島を見るとバスタオル一枚だった。豊かな胸とムチムチの太ももが視界に入る。彼女が出たらさっさと帰ろうと僕は思っていたが、彼女の姿を見て僕のモノが反応してしまった。

「まずい、治まれっ！」

「せっかくだし風呂ぐらい入れば」

庄島が促す。彼女は僕が反応していることに気づいているようだ。ここはかえって風呂にでもじっくり浸かったほうがよさそうである。

「そうですね風呂ぐらい入りますか」

僕は浴室へ入っていき体を洗う、浴槽にはお湯が張ってある。庄島が入ったのだろうが意識せず僕は浴槽につかった。

体が温まり気持ちよくなって鼻歌を歌っていると

ガラガラ…と浴室を開ける音が耳に入る。

一糸まとわぬ姿の庄島が目の前に来てシャワーを軽く浴び浴槽に入ってきた。改めて見ると本当に魅力的な体をしている。

「しよ、庄島課長！ 出ていってください」

「何いつてるの、ここは正直じゃない」

庄島の体を見た僕のモノが反応してしまっている。

「庄島課長には関口がいるんじゃない」

「関口くん？ なにそれ」

「付き合ってるって」

「私と関口くんが？ 変なコト言わないで」

「でもこの前ぼくの家に来た晩、関口に付き合ってたんでしよう」

「そんな訳ないわよ。あんなの好みじゃないし、酔って一回寝ただけよ」

たしかに関口は見栄を張ることが多々ある。

「じゃあ彼氏は別に居らっしゃるんですか？」

「嘘ついちゃった。本当は彼氏なんていないのよ」

真実かは分からないが彼女の体に欲情してしまった僕は都合よく信じる。それなら庄島を気兼ねなく抱けるからだ。

「立ちなさい」

言われるままに立つと彼女は僕のモノを口に含む。

「……………あつ……………くつ……………もつ……………」

ものすごい舌使いで僕は翻弄され、段々理性が飛んでいく。

「あつ……………」

一分も持たずに僕はいつてしまったが僕のモノはまだ快楽を要求するかのごとく硬いままである。こんなに庄島が性に長けているとは想像もつかなかった。

「ねえ続きはベッドでしましょう」

彼女の言うがまま僕はベッドと一緒にいく。

「きて」 彼女がベッドに横になってそう言うと、僕は理性を失い一心不乱にその豊満な体を貪った。

月曜日、朝起きると一昨日の疲れがまだ幾分か残っていた。自分でも信じられないくらい激しいセックスをした。あの日の少女に会えなかった悔しさが僕の性欲を旺盛にしていたのだろう。

重い体を起こし目をこすってテレビをつけいつもの習慣で新聞を読む。そしてコーヒーを飲み歯磨きをしたりと身支度を整え駅へ向かう。

プラットホームに桂あゆみの姿があった。僕はすぐに彼女のもとに向かう。

「あゆみちゃんおはよう」

彼女が振り向く。

「不潔！」

僕を見るなりあゆみは怒った声でいう。周りの視線が一気にこちらに移る。

「不潔？ なんのこと」

「一昨日のことですわ。私病院に姉をお見舞いにいった後街に買い物に行きましたの。そこで、その……佐々木さんが女性とその、ホテルに入っていくところを見ていたのです」

後半になるほど声が小さくなっていく。

「……」

「あのホテルは男女の関係を持った人が行くところですよね」

「そうだ」

「ということはその女性と佐々木さんは特別な関係なんですよね」
ここで嘘はつけない。

「君の言うとおり僕とその女性は特別な関係を持った。でも結婚するとかじゃない」

「不潔です。結婚してないのにそんな事するなんて」

「君はまだ子供だからわからないにそんな事するんだよ」

「私は結婚する人以外そんなことはしません」

口角を上げながら言う。

「君には君の考えがあつていい。けれどそれを人にまで押し付けるのは良くない」

「私は佐々木さんだから言うんです」

「えっ！」

「あっ！」

あゆみは顔を紅潮させる。

彼女は僕のことを、いやこの年代特有の年上に対するあこがれと
いうのだろう。

気まづくなつた。でも一昨日のことを言っておかないと。

「実は一昨日、僕は病院に面会に行つたんだ。でも身内じゃないから会わせてもらえなかつた。せめて君と一緒に行っていれば会うことができたと受付の方が言っていた」

「それでは私と一緒に面会に行きたかつたということですか？」

「そうだ」

「じゃあ、どうして一人で行つたんですか」

「僕は君の連絡先を知らない」

「……」

僕はあの日の少女と会うことを諦めなければいけないのか。ここまで近くに来ておきながら。

二人が黙っているときあゆみの乗る電車がプラットフォームで停車した。ぼくに何も言わず彼女は電車へと歩を進める。

「お願いだ！ あゆみ会わせてくれ」

そう言つても彼女は振り返ることはなかつた。

その夜、僕は久しぶりにネット将棋に興じていた。

精神的に不安定なためか負け越している。頭が働かないから手を迷つた上にうっかりミスをしてしまう。

あんなに将棋が楽しかつたのに、これでは感動の一手どころではない。

僕は勝つことを思い出すために格下に対戦を持ちかけると相手が

了承してくれた。そして穴熊で確実に勝ちを拾うことができたが全然楽しくはなかった。勝つただけに将棋を指すのなら低級でわざと負けて勝ちたい時に勝てばいい。でもそれでは将棋は面白くはない。

僕の求めているものはお互いに全力を出し切る上での勝ち負けのしのぎあいだ。

けどどいまの僕は執念というか粘りが無い漫然と機械のように指しているだけ、しばらく将棋を封印しよう。僕はパソコンをきった。

「ねえ、まだ将棋してるの？」

「終わったよ。絵里さん」

「寝ちやうとこだったじゃない」

「寝ても良かったよ」

「わざわざ来たのにその言い草はないでしょ」

「ごめん」

「それなら行動で示して」

僕はベッドに入り庄島を抱いた。

彼女が帰って何気なく携帯を見ると着信が入っていた。

名前は『あゆみ』と出ている。

あゆみ？ いつの間に……。

僕は『あゆみ』に電話を掛ける。夜中であるから寝ているかもしれない、そう考えたが三回目のコールで彼女は出た。

「もしもし」

あゆみの声だ間違いない。

「いつの間に携帯に番号入れていたの？」

「あの日の朝、出て行く前ですわ。あなたは気付いてなかったみたいね」

「今知った」

「あなたが一緒に面会に行こうって言っていたから」

僕は自分の不注意さというかアホさに呆れてしまった。そうだよな病院を教えるくらいだから身内しか面会できないくらいは知って

いるはずだ。朝の駅での会話の不自然さの謎が解けた。

「僕は馬鹿だね」

「そうですね」

はつきり言われスッキリした。

「自分の携帯すらろくに見ていなかった」

「まあ、私も教えなかったのは反省してます。メモに書いていればよかったですね。それで佐々木さんはまだ姉に会いたいですか？」

「会えるものなら会いたい」

「明日、会いに行きますか」

明日は火曜日、平日だ会社は勿論休業ではない。しかし、あの日の少女は余命が残り少ないという。彼女が休日ではなく平日に誘ってきたということは病状が思わしくないのかもしれない。

それなら会うしかないという結論を僕は出した。

「会いに行く」

「わかりました。それでは明日私が朝そちらへ伺います」

「そうしてくれると助かる。おやすみ」

「おやすみなさい」

翌日

朝10時10分前に彼女は僕の家に来た。

僕は家に鍵をかけタクシーで病院へと向かう。受付に行くにあゆみは受付嬢に会釈をし

「桂京香の家族の者です」

と、言い病棟に取り次いでもらう。受付嬢も彼女の顔を憶えているようで対応が早い。僕のこと覚えていたようで

「この間はすいません。規則なものですから」

深く頭をさげる。

「いいえ、何かがあってからでは遅いですからね。あなたの対応は正しかったです」

僕はそう返して。こちらこそすいませんと頭をさげる。

5分以上待つていただろうか、看護師が受付にやってきた。

「面会に来ました」

「今日は体調が良さそうよ。結構、おしゃべりできるし」

「その方は？」

「彼氏です！」

彼女が腕を組んできた。僕は口に出してまで否定はしないが僕を見る看護師は怪訝な表情をする。

歳の差があるからな、でもそういう事におかないと家族以外は面会できないから仕方がないよな。

僕とあゆみは案内してくれる看護師の後ろについていく。

「面会時間は45分です」

そう言い残して看護師は職務に帰っていった。

コンコン……

「姉さん、来たわよ」

あゆみはドアを引く。ベッドの周りはカーテンがかかっておりドアの近くからあの日の少女を見ることはできない。一人部屋だ。

僕とあゆみは部屋の中に入っていきカーテンを開く。そこには上半身を起こし腕には点滴が繋がれ瘦せこけている女性の姿があった。その顔を見ると僕はすぐさま脳の奥にしまいこんでいたあの日の少女の顔を思い出すことができた。

間違いない！ 彼女があの日少女だ。

「おはよう姉さん」

「今日学校は？」

「休んじゃった」

「きちんと学校は行かなきゃ駄目でしょ」

声は意外にしつかりしている。彼女は僕に気づく。

「そちらの男性は誰かしら」

「私の彼氏よ」

「そう、彼氏ができたのね。はじめまして、桂京香といいます」

「佐々木亮といいます。今日はお姉さまに会わせてもらいに来まし

た

「こんな姿、あんまり見られたくないわ」

「彼氏だからいいじゃない」

いつまで僕は彼氏のふりをしなければいけないのだろうか。

「そうだ、亮さんが姉さんに話したいことがあるそうよ」

あゆみが話を進めてくれる。

「何かしら？」

「私もわからないわ。じゃあ、しばらく二人きりするね」

気のきく娘だ。

彼女は部屋を出て行った。二人きりになった僕は京香になんと話しかければいいのか言葉が思いつかない。

「あなたのことどこかで見た気がするんだけど」

京香が沈黙を破ると僕の頭に一手浮かんだ。

「7六歩」

京香はその一手で気付いたらしく次の一手を指して来る。

「3四歩」

「2六歩」

.....

「4七金打」

「参りました」

62手で投了する。あの日と全く同じ手順、僕はずっとこの棋譜を覚えていた。忘れることなどできなかった。それは京香も同じで棋譜を覚えていてくれた。

「懐かしいわ。何年ぶりかしら」

「十五、六年になるかな」

「あの時のトーナメントの一回戦であたった野球帽をかぶった少年ね」

「覚えていてくれてありがとう」

「忘れるわけないわ。七六歩をあなたが打った瞬間、私の頭に雷が落ちたのよ。変な話でしょ」

「変じゃない、君が三四歩を指したとき僕の頭にも閃光が走って君の右手は光っていた」

「なんだったんでしょね」

「僕にもわからない。ただ、僕はその日から今日まで君のことを探し続けてきた」

「私もあなたを探し続けてきたのよ。将棋道場巡りとかしたわ」

「僕もした」

「恋だったのかしらね」

「僕はそうだと思っている。君が僕の運命の人であると信じている」
「……でも妹から聞いているでしょう」

僕は彼女が何を言いたいかわからないが知らないふりをしたほうがいいのか迷う。しかし彼女だけには嘘をつきたくはない。

「聞いている」

「あと半年……私とあなたは結ばれていなかったようね」

「……」

そんなことないさとは言えない。現実には彼女自身が一番分かっているのだから。

僕は彼女の言葉にひどく心が落ち込み、鬱然とした顔になる。空気が出せるほど僕は器用な人間ではない。

「厚かましいことお願いしていいかしら」

彼女が努めて明るい口調になった。

「僕に出来ることなら」

「あなたが独身で一人暮らしならできることだわ」

「僕は独身で一人暮らしだ」

「よかったわ。じゃあ、言うわね」

「うん」

「妹……あゆみのことを面倒みてくれないかしら」

「それは……」

「お金の心配はないわ。両親の保険金でなんとかなるし」

「そういう事じゃなくて」

あまりにも想定外の願い事である。

「私が死んだらあの娘一人ぼっちになっちゃうの」

「うん」

「あゆみはあなたのことが好きみたいだし。あなたはあの娘嫌い？」
「嫌いじゃないよ。でも腕を組んでいたのは彼氏のふりをしていたからだよ」

「ううん、あゆみはあなたのことが好きだわ。姉だから分かるのよ」
「あゆみちゃんはまだ高校生だし一緒に住みたがらないんじゃないかな。彼女は固いところがあるし」

「高校生だからこそ誰かと住んだほうが安全でしょ。私がこの世に残している最後の未練があゆみのことなの」

京香の気持は痛いほどわかる。心配事を抱えているようでは治療にも支障をきたすだろう。人間は死ぬまでは生きている。だから最後まで希望を持たなければいけない。

彼女の精神的負担を少しでも軽くしてあげることが必要なことだ。

コンコン……

ノックをして看護師が部屋に入ってくる。

「ごめんなさい、いまのことは忘れてちょうだい。そろそろ時間じゃないかしら」

時計を見ると45分を過ぎていた。

「面会時間のことを言いに来たんですか？」

「はい」

「5分過ぎましたね」

「次からは気をつけてください」

「はい、わざわざすみませんでした」

僕が部屋を出て行く。あゆみはエレベーター近くの長椅子に座り本を読んでいた。

「待たせたね」

「長かったわね。どんな話をしたの？」

「昔話をしていた」

「姉さん、あなたのこと気付いたんだ。よかったわね」

「うん」

「どうなさったの？ 落ち込んでいるようですわ」

「そんなことないよ」

京香が死んだらこの娘は一人になる……か。

初めてあゆみと出会った雨の日僕が彼女の世話を焼いたのは同情や哀れみだったのか？

「お昼何にしようか？ おごるよ」

「なんか下心があるんですか」

「君みたいなガキは眼中に無いよ」

「Dカップあるのに？」

「心はまだ子どもだよ」

「ひどーい。じゃあ、こんな事されても平気ですよね」

腕を組みさつきよりも強く腕に胸を押し当ててくる。

「どう見ても兄と妹だよな」

「ふんっ」

頬を膨らませる。やっぱり子どもじゃないか。僕は京香の提案をあゆみには言わないでおいた。

その晩、僕は庄島を家に呼んだ。

「こんばんは」

「わざわざ呼び出して。すみません」

僕の顔を見た庄島はなぜ僕が彼女を呼んだのかを瞬時に察したらしく恋人に振りまく笑顔から一転して真剣な表情になり、長いまっげの大きな瞳を下に向ける。

「早かったですね」

僕は缶ビールを手渡して彼女に言う。静けさが二人を包み木の葉を揺らす風の音だけが聞こえる。

遠まわしに言うことは僕の性格ではできない。純情というより経験が足りないためだ。それが人を傷つけやすい事は分かっているがその覚悟はできている。

僕が彼女にしてきたことを踏まえれば恨まれても理は彼女にある。絵里さん、僕たちの関係は今日で終りにしましょう」

もつと気の利いた言い回しがあるだろうが良くも悪くもこれが僕。別れてということね」

静かに落ち着いた物言いで彼女が答える。

「すみません」

「謝るのはやめてよ。なんか惨めじゃない」

「絵里さんならきつといい人が見つかる」

「ありがちなセリフよね。三十路前の女にきついこと言うのね」

「絵里さんは素敵な人です」

「それならなぜ別れるのかしら。好きな人ができたのね」

好きな人ができた……違う、好きなことに気付いたんだ。あの雨の日、彼女に出会い僕は一目惚れをしていた。

僕は運命の人の妹として彼女を見てきたつもりだったが、京香と話をし面倒を見てくれないかと言われたとき自分が彼女……桂あゆみを愛していることにはつきりと気付いた。

その時自分の素直な気持ちに従い返事をできなかったのは運命の人だと心に決めておきながら、その人の命が短いと分かっただけで、次の女性に心移すことが醜いことだと思っただけである。いや、心はあゆみにあつたが認めることが自分の美学に反するというべきか。

庄島には失礼なことではあるけど僕は庄島を愛してはいなかった。彼女の体に性欲が溺れただけだ。だから僕と庄島はあゆみの存在がなくともいずれば別れていた、少なくとも結婚はしなかっただろう。

「そうです」

そう言うのが適当だと思った。

「それなら仕方ないわね、若い頃ならそう言えたんだけど」

「若いじゃないですか」

「私は魅力無いんだね」

缶ビールを一口だけ飲む。

「魅力は充分過ぎるほどあります」

「この前と同じ問答ね、お世辞はいいわよ。それならなんで振られるのかしらね」

「運命の人が見つかったんです」

「運命の人？」

何を言うんだという表情になった。

僕は閃光の一手の話をすることに決める。せめてもの誠意として。

「絵里さんが初めてこの家に来たとき将棋を指してもらいましたよね」

「一度目の振られたときね」

その言い方をされると胸が痛む。

僕は庄島に閃光の一手の話をする。

「それでその人がいたということね」

「はい」

「嘘っぽい話。だけど亮君なら有り得そうなのが困るのよね」

庄島は目を伏せてしばらく考え込む。

嘘だと言われれば嘘だ。僕が今現在愛しているのはその『運命の人』の妹だから。

「……わかったわ信じましょう」

そう言うと庄島は立ち上がり帰っていった。

僕は帰っていく庄島の姿を見て頭をさげることしかできなかった。

エピソード

三日後、亮は再びあゆみと共に病院へ見舞いに来た。

「京香さんこの間の件ですが、将棋で決着をつけようではないですか」

亮は提案をする。

「忘れていいんですよ」

「忘れられませんでした。あゆみちゃん、いまから僕と姉さんは将棋を指すから棋譜をしっかりとつけてくれるかい」

そう言つて。亮はまっ更な手帳の一番最初のページを開いて渡す。

「これに書いてくれ」

「はい」

「では始めましょう。7六歩」

「3四歩」

「2六歩」

「8四歩……この手順は」

四手目を指したところで京香の目が涙ぐんだ。亮の意図がわかったのだ。

「2五歩」

……………

「よ、4七金打」

「参りました」

亮は頭をさげる。京香はポロポロと涙を流している。

62手で呆気無く終わった将棋。感動の一手も好手も奇手もない。歴史に残る棋譜なんてものでもない。でもその一局には人間の愛が詰まっている。運命の人に捧げる最後の愛が……。

「ありがとう佐々木さん」

「何をおっしゃいますか。僕はあなたと賭け将棋をして負けただけです。僕もまだまだです」

「賭けつて何？」

あゆみが訊いてきた。京香は亮と同様、あゆみには亮に言ったこととは伝えていなかった。

「あゆみちゃん、僕は僕と一緒に暮らすんだよ」

「そんなこといきなり言われても」

驚くのは当然だ。

「京香さん。僕は約束を守ります」

「姉さん説明してよ」

「僕から言うよ。姉さんは自分の命のことよりも自分の死後、君がどうなるのかを心配していた。そして僕に君を預かってくれないかと持ちかけてきたんだ」

「そんなこと勝手に決めないでよ」

「あゆみちゃん、佐々木さんのこと愛しているでしょう」

「う、うん。でも佐々木さんは私のことどう思っているのかわかんないじゃない。佐々木さんのことも考えてよ。佐々木さん結婚もできなくなるじゃないのよ」

「僕は結婚するつもりだ。あの雨の日、僕は君に一目惚れした。それは同情や哀れみではない。姉さんに会ってようやく確信することができた。君が断るのなら僕は結婚できないけどね」

亮はスーツの内ポケットから婚約指輪を出す。

「受け取ってくれるかな」

あゆみは、心の準備などできていなかったたので頭の整理に時間を要した。

けれども愛する気持ちは亮にあるので

「……はい」

とプロポーズを受け入れた。亮は婚約指輪をあゆみの左手の薬指に嵌める。

「高校を卒業してから結婚しよう」

「不束者ですがよろしくお願い致します」

「学校に通うときは……」

「もちろん、嵌めたまま通います！」

「あゆみちゃん」

「亮さん」

二人は誓いのキスを交わす。

見届けた京香は女神のような優しい笑を浮かべた。

それから三ヶ月後、京香は安らかな顔で息を引き取った。医師の話によれば余命を聞かされた京香は妹には長目に余命を告知して欲しいと望んだそうだ。

その後、結婚した亮とあゆみは今でも毎年、京香の命日に62手の将棋を指している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3369t/>

62手

2011年5月17日20時55分発行